

三木露風とトラピスト修道院

—露風先生と教え子たち—

近藤 健史

はじめに

三木露風は、修道院で先生と呼ばれていた。北原白秋と並んで「白露時代」を築いた象徴詩人露風は、中央詩壇を離れ「祈り・働け」をモットーとする北海道当別トラピスト修道院で生活した。いろいろな意味で大きく変化した環境の中で、若い祈祷士志願者の講師として新たな道を歩んだのである。

露風の講師生活は、大正九（一九二〇）年五月に赴任し大正一三（一九二四）年六月に辞任して帰京するまで、三二歳から三六歳までの四年間である。二年目の大正一一（一九二二）年四月には夫と共に受洗し三木パウロの洗礼名となる。一日の生活は、修道院の坂下にあった教師館から修道院に通い、授業は午前中だけで午後は瞑想・思索・作詩にあてられていたという。

その修道院時代を『修道院雑筆』（大正一四年・一九二五年）、『修道院生活』（大正一五年・一九二六年）、論集『神への道』（大正一五年）、自叙伝『我が歩める道』（昭和三年・一九二八年）などで伝え、作品を『修道院詩集第一巻 信仰の曙』（大正一一年・一九二二年）、『トラピスト歌集』（大正一五年）、『修道院詩集第二巻 神と人』（大正一五年）にまとめている。

露風研究史における修道院時代については、修道院生活や作品の

研究が中心であり、「講師」として修道院に勤めたにもかかわらず、教育的な実態については明らかにされてこなかった。その要因の一つは、露風が残した「講師の仕事」に関するものが少ないことにある。本稿は、露風研究史の空白を埋めるため、信仰に支えられた修道院生活の中で露風先生として故郷や親元を離れた少年たちにどう接したのか、何を教えたのかについて、教え子の視点から究明を試みたものである。具体的には露風が添削した生徒の作文ノート、教え子の神父が残した資料、周辺の子どもが演じた「降誕祭」劇の台本など未公開資料を紹介しつつ論じたものである。なお、この講師生活が修道院時代の童謡の多作や童謡「赤蜻蛉」の作詞の基底に関わると思われる。

一、トラピスト修道院と教育的環境

（一）修道院の略史と修道士の生活

トラピスト修道院の歴史は、明治二四（一八九一）年四月に函館教区が発足して間もない頃、アレキサンドル・ベルリオズ初代司教が布教のため渡島上磯郡方面を訪れ現在の修道院が建っている土地を見て、この地に修道院を建てたいと思ったことから始まったという。明治二九（一八九六）年一〇月にD・ベルナル・ファール

は、修道者九名（司祭二名、助祭一名など）を連れて来日。一月二日に創立修道院開院式が行われ、明治三〇（一八九七）年フランス国ノルマンディーのブリックベック修道院の副院長であったジュラルル・プワイエ師が修道院長として着任した。

その後、修道院長は明治三三（一九〇〇）年に帰化して岡田普理衛となった。帰化するまでの略歴は明らかではなかったが、露風の残した『ノート32』に記してあった。それによると旧名フランソアー・フリエ、安政六年（一八五九）年一月一日日生、明治一二（一八七九）年八月仏蘭西國カルアドズ県ウリエルセック中学校全科卒業、明治一六（一八八三）年六月同県ソメルユ神学校卒業、明治一六年七月同国マンシュ県ブリックベック大修道院に入り修道士となる。明治三〇（一八九七）年一月二七日日本邦に渡来し北海道渡島国上磯郡石別村字石倉野番外地に寄留したとある。^{註1}

修道士は、白色衣を着た祈祷修士と褐色衣を着た助修士の二つに大別される。その修道士には、志願者、修練者、修道士の三階段がある。志願者は中年者や教育がある者でもかかわらず、少なくとも二・三年は志願者で過ごすなくてはならない。

トラピストは世俗を離れて修道する。その業務は祈祷と労働と研学であり日課もこの三つに分かれる。そこでの生活は、各々すべてを分担し、各部署で修道士自身が働く。起床は午前二時、ただちに聖堂で祈り、その後は黙想で聖書や修養の良い書物を読むことも認められている。またミサ聖祭が二・三回ある。朝の祈祷後に朝食、日の出と共に助修士は働きに出て祈祷士は研学に入る。研学は七時三〇分から始まり一〇時または一一時半まで、午後は祈祷士も主として労働に出る。就眠は夏午後八時、冬は午後七時、夏は昼に一時

間ほど睡眠がある。^ま

(2) トラピスト修道院附属孤児院と小学校

明治二七（一八九四）年、渡島国亀田郡上湯ノ川村にアレキサンドル・ペルリオズ函館司教により孤児院が設立された。明治二九（一八九六）年に上磯郡茂別村ノ内石別村のトラピスト修道院に移されて修道院附属孤児院となり、トラピスト学園と呼ばれた。管掌者は岡田普理衛修道院長の代理人ならびに名義人の佐藤忍が務めている。

修道院創設の頃は、付近に小学校がなかったことからトラピスト修道院は地方教育の充実のために明治二九（一八九六）年に私立野上尋常小学校を敷地内に設立した。明治三六（一九〇三）年三月二九日に修道院が火災に遭い建物を焼失したため四月一八日に休業。孤児院に修道院が移転。そのため校舎老朽化により現渡島当別駅前（注2）に明治三一（一八九八）年から新築移転していた当別尋常小学校に収容児童を通学させた。その小学校は明治三八（一九〇五）年に石別尋常小学校と改称され、当時の在籍児童数は一〇八名であった。孤児院の方は昭和八（一九三三）年まで継続（延べ二九二〇人が養育）させたが、野上尋常小学校は明治三五、六年頃三〇余名もいた収容児童もしだいに減少して大正一四（一九二五）年に三一年の幕を閉じている。

(3) 当別教会の信者が語るトラピスト学園（修道院附属孤児院）

トラピスト学園創設期の様子について、修道院の坂下にある当別教会（聖ルタ教会）の信者が伝えている。歴史と環境を知る貴重な

資料であるため全文を紹介する。^{注3}

「揺籃（ゆりかご）」

今のグラウンドのある敷地に学園と呼ばれる建物があった。道路とは直角に長さ60M、幅10Mの細長い木造の建物で、つくりは学校などの造りに似て、全面に端から端まで長い廊下があり、廊下に面していくつかの教室がしきられていた。道路に面した右端には教師や世話人たちとその家族のための部屋もつけられていた。この建物は函館教区長ベルリオーズ司教がトラピストをこの地に招致した時、修道院の仮住居とともに建てておいたものである。それまで函館教区で経営していた「湯ノ川孤児院」をここに移してトラピストにその経営を委せるためであった。

この建物の中にはこざっぱりした小聖堂もあり、はじめのころの信者たちはここで祈りもし、日曜日にはミサにもあずかった。ミサのためには必要に応じて修道院から司祭がおりてきて世話をしてくれた。ミサだけではなく孤児たちの世話も、教師や世話人たちにだけ委せておかず修道士がおりてきて一緒に世話をした。

明治29年10月28日、いよいよ9名からなるトラピストたちが来朝し創立の第一歩をしるした。翌明治30年にはそれまでシスターたちの世話をうけていた湯ノ川孤児院の児童たち36名が当別に移されて、孤児たちはこの学園で新しい経営者と世話人たちの世話を受けることとなり、名前も「トラピスト学園」と呼ばれるようになった。

草わけのころの信者にはこの学園の子どもたちと、トラピストを慕って隣村の木古内や知内方面の開拓地から移り住んできた中から多く出た。修道院の仮住居が火災にあった年の前年すなわち明治35年に受洗者の数は52名で、1年に10名の割合で信者がふえている。

二、露風のトラピスト修道院への道

(1) 露風が語る講師になるまでのいきさつ（動機・事情）

露風が着任した大正九（一九二〇）年頃のトラピスト修道院には、修道士が六〇人余り、トラピストに付属した信者が家族と共に一五〇人程いたという。

露風は大正一二（一九二三）年九月一日の関東大震災後、一〇月に親戚・知友の見舞いに上京、二二日に大阪玉造教会を訪問、翌日教会で講師赴任の動機・事情について次のように講演している。取材した雑誌記者がまとめたものであるが、資料として貴重なため関係する部分を紹介する。^{注4}

「大正二二年一〇月三日、大阪玉造教会にて、『三木露風氏の講演』」

私が北海道のトラピスト修道院に国文学の師として這入りましたのは丁度四年前でありましたが教理を解して真の信仰生活に入るまでには余程年月を経ました。これより先、私は恰も迷へる羊の如く頼りと道を求めてゐたのであります。大正四年八月に初めて北海道の地を踏みトラピスト修道院を訪ひまして、其の修院生活に就き感じたことを綴つて十月に『良心』と云う

ふ題の詩集を出しました。私は当時心に非常に不満を抱いて居まして唯単に享樂的文藝に満足し得なかつたのであります。そうして自然を友とし、社会を敵として居た（イブセンの『社会の敵』の様に）

当時東京郊外池袋草庵の限りなき孤独生活の内に限りなき喜びもありましたが、北海道に行きましてからと言ふものは全く私は精神上に一新紀元を画したのであります。帰京後に修院長プリエ師は丁重な賀状を下さいましたので、私も御返事を差上げますと誠に有難い御言葉を戴いたのです

それは私の詩集『良心』は永久に修道院に残し、又仏、伊两国にも送つたと言ふことであります其翌々年にも行きました、大正八年の夏、突然私は帰郷を思切つて再び北海道へと東京を離れました。途中の山水風景の美に酔はされ、芭蕉の跡を慕ひつゝ終にトラピストに着きました。恰も箒を手にしてゐた一修道士は抱かんばんかりにされました。続て副院長もゐらつしやいまして誠に懇に御待遇下さいました。間も無く、唯今修院に国文学の良師が居ないからは非一つやつて貰ひたいと切に御頼みがありました。余り突然なのに驚きましたが、唯今の処では忙しくもありますから何卒考へさして頂きたいと申し上げますが、然し私の心には東京と云ふものに未練がありました。トラピストに半永住することになりますと喜ばしいこともありませうが、又一面には悲しいこともあるでせう。こんな色々な思が乱れる様に浮んで参ります。修院生活はかねての希望でもあり、沼津のプリン師に初めて話を聞いて十四年前から知つてゐたトラピストに半永住するには喜びも悲しみもある。即座に応

じ兼ねてゐる所に修士等は仲々許してくれさうにもありません。では仕方が有りません。兎角茲二三日間教へさしていただきます。

二三日も過ぎました所が院長はせめて夏中でも教へてくれと切望されます。此時初めて私も決心を固めたのであります。さうして直ちに其由院長に伝へますと非常に御喜びになりました。しかし故郷に病んで居ります父を見舞ひ又帝都に残して置いた色々な仕事の整理のため一応帰京いたしました。事の成行きを妻に話しますと、全くの不賛成でもないが、東京生まれで地方を知らぬ彼女は悲しんでをりました。然し夫れよりも友人及び社会の反対は実に甚いもので、何故北海道の様な田舎下だりまでして苦しまねばならないのか、東京の方が良いではないか、今一度思直してくれ。こんな種類の運動はますます多かつたのですが、既に私の心は東京を離れ切つてゐたのであります。然しあちこちの別宴は誠に涙ぐましい思ひが致します。例へば日本作曲協会の土方伯爵邸の別宴の席上、私の文藝上の兄弟であります山田耕作は、今迄社会の種々な出来事に対して無関心であると云ふことは良い、色々と干渉して世の中の事を考へるものぢやないとのみ思ひ込んで居たが、今親友三木露風が此の問題に遭遇し、全く無関心で居ることが出来ない。私等は唯今では一日も早く氏が帰京せらるゝ様に御願ひいたしたい。即ちこの会はこれから引留会に替へようぢやないか、と云ひました。又、或る大学の教授は、妻に露風氏一人丈北海道に行つて貰つて貴女は東京に御残りになつたら如何でせうと笑ひながら申しました。妻はトラピストに参りますと私が何時も御腹を悪くい

たしますから、私は台所の世話をする為に参りますと答へたと
言ふことで御座います。

迷える羊の如く道を求めていた露風に対し、修道院側は露風の招
聘について二つの目的があった。修道院創立史をまとめた高島源一
郎神父は次のように伝えている。^{注5}

修道院では祈祷士志願者の教育が問題にされていた。それは
その当時、ほとんど全部が小学校を終わっただけで入会し、中
等教育は院内でこれを行わなければならなかったことからであ
る。そして臨時に教師を頼んだこともあったが、定まった教師、
ことに国語、国文のような大切な科目の教師がなかった。そこ
で三木露風がトラピストを慕って来院するのを見て、一つには、
この優れた詩人を信者にするこの布教上大きな影響があるこ
とも考えられて、露風を講師に招いてはその意見が生じ、相談
の結果これを露風に申し出るようになった。露風はこれを承諾
し、ここに大正九年から満四ヶ年の当別滞在、修道院の講師と
して勤めることがまったのである。

右によると「講師」就任は、信仰の道を求めていた露風と、国語・
国文の教師を必要とし、布教のために著名な詩人を信者に迎えたい
とする修道院の願いがかなったことによる。露風の修道院行きに対
し友人・知人の反対もあったが、露風の神を求める精神が勝り決断
したのである。

赴任前の露風は『寂しき曙』（明治四三年・一九一〇年）頃から

意識して象徴詩をめざし、懐疑、悔恨、苦悩の淵に沈んでいた。ま
たこの頃の露風は信仰への希求と苦悩があり「恰も迷える羊の如く
頻りと道を求めてゐた」という。具体的には、明治四四（一九一一）
年から大正二（一九一三）年を「陥没の時代」と呼び、「懐疑」を
抱え漂泊の旅をしていた。その求道生活を次のように述べている。^{注6}

『白き手の獵人』を出すまでの、三年といふものは、私にとつ
ては、陥没の時代であった。私は、そのあいだ、東北の湖畔に
居たり、東海道を旅行してゐたり、又、京都に居たりして暮し
てゐた。

その頃、私は、非常な懐疑に落ちてゐたので、詩も殆ど遠ざ
かつたやうになつてゐた。沼津で公会堂へ毎日行つて、暮して
ゐたことや、京都での参禅生活などは、私にとつては、寔に意
味深い記憶である。

トラピスト修道院への道の第一歩は、その旅の途中にあつた。^{注7}

二十四五歳の此、予は苦がい懐疑と共にさすらふて居つたが、
其頃ふと足をとゞめた東海道の或町で独逸人の宣教師ピリン、
傳道師水田爲一の兩氏と知合ひになり教會に行つたり又基督教
の書籍を讀んだりした。トラピストに關する知識は其時初めて
得たので、予は然ういふ折柄是非共脩道士とならうと思ひきは
めたのであつた。爾來志を果さずに數年を経た。今日予は教會
を離れてはゐるが神を求むる精神は別様の意味で自分の内に燃
えてゐる。其故に予は屢々反省し、反省の度びに脩道生活を思

つた。トラピスト修道院は、かくして夢寢にも忘るゝことが出来なかつた。今年予は壮大なる彼地を訪ふた。

さらに文学的な「懐疑」には「当時私は心に非常に不満を抱いて居りまして、唯単に享樂的文藝に満足し得なかつた」、そして「自然を友とし、社会を敵として居た（イプセンの『社会の敵』の様に）」と述べている。

この「享樂的文藝」とは、蒲原有明に始まり明治四二（一九〇九）年に刊行され官能退廢的詩風の代表となつた北原白秋の『邪宗門』から詩壇が官能享樂主義の時代になつたことをいうのである。露風の西欧の象徴詩の影響を受け、観念的思想的な詩風とは異なるものであつた。

また『社会の敵』は、ノルウェーの劇作家イプセンの戯曲『人民の敵』（一八八二年）が原作である。『人形の家』（一八七九年）と『幽霊』（一八八一年）への保守派からの非難に対して、革新的思想とは何かと答えた作品といわれている。日本では明治三四（一九〇一）年六月から七月にかけてこの劇の翻案が森晋太郎記者により『時事新報』に連載、九月に出版されている。イプセンの『人民の敵』を『社会の敵』の題名で最初に翻訳したのは高安月郊で、明治三八（一九〇五）年一〇月に『人形の家』の翻訳と合わせて『イプセン作社会劇』と題して出版されている。原作には町に不都合な真実である環境汚染を告発する主人公、守るべき正義を掲げる個人を抑圧する多数派の暴力などが描かれている。正義感、民衆にとつては敵でしかなく、主人公とその家族はしだいに孤立して行くというストーリーである。

明治四二（一九〇九）年頃より露風と北原白秋が詩壇の中心になり始めると二つの派閥が生じ、大正四（一九一五）年における批判文のやりとりから始まつた後輩たちの反目は神秘主義と象徴主義に關する詩壇論争へと發展した。露風の「大正五（一九一六）年以降は、露風の主宰する「未来社」の党派的一派と北原白秋らの「スバル」派と対立して詩壇を二分する辛い時期であつた。大正六年には萩原朔太郎が「三木露風一派を放逐せよ」を発表して批判した。露風はフランス象徴詩の影響を受け、芭蕉や能に影響された独自の象徴詩を掲げ批判されたことから『社会の敵』に共感したのである。

三、露風先生と教え子・祈祷士志願者

（一）修道院の祈祷士志願者

露風が講師として祈祷士志願者に教えたのは、普通学の国語関連である。普通学は中等程度の五か年で、中学校と同じく国語、漢文、数学、歴史、地理、博物、作文、習字等を学習、外国語はラテン語を学んでいた。規定の学を終えるまでに九年を要し、普通学から後の期間は哲学と神学を学ぶ。そして徳行のある者が司祭に採りあげられるのである。生徒は、一番多い時で二〇名ほどがいて、ほとんどが尋常小学校六年を終えた少年たちであつた。

『新詩会』の同人で詩人百田宗治は、大正一二（一九二三）年二月頃に修道院の露風を訪ね「玄關の土間の壁に学校の時間割表が貼りつけてあつたと覚えてゐる。その時間割表には就寝、國語、算術などといふ文字があつて、私は三木さんはこゝでは小學校の先生なのだと思つた」と回想している。

その授業について高島源一郎神父は「露風の講義は主に国文学、

文法、作文等で、始めとりつき難く感じた生徒たちも、すぐに馴れて、わが国一流の詩人から授業を受けるのを密かに誇りとしていた」と記し、生徒に対しては「常に親切で、稚拙な作文や作詩の添削には丁寧懇切、一々評を添え、励ましの言葉を記した」と伝えている。

(2) 露風先生の作文指導

その露風先生の指導した「ノート」が未公開のまま残されていた。生徒たちの祈祷志願室で書いた作文や詩には、露風の親切・丁寧な添削指導や評、評価が記されている。多くの作品の中から次の作品三篇と評三篇を紹介する。

① 優秀 詩「暗き淵より」

底なき淵より啼く黒き鳥／其の舌はしぶり／灰色の悲哀に満ちたる声もて／池のほとりに救いを呼ぶ

暫しののちに／まがつみの炎を負ひて出で来るものあり／さきものものの口に焔をふきかく／しかもあらぬ声もて救を求む呼ぶ救ひの手は彼れを掩ひぬ／まがつみのもの光に恐れて／底無き淵へと転び行く。

一讀深い悲哀を感じる、表現は一句一句に暗示の効果をもつてムダが少しもなく優れてゐる／また此詩はまぎれもない立派な象徴詩である

一九二二年五月廿三日／三木

② 甲 作文「愛」 露風の添削箇所の一（一）印は挿入、（二）印

は訂正を示す

愛と云ふ言（葉）程吾に平凡な言があるであらうか！が愛（他の）行為程人に好まれ、人を喜（喜↓歡）ばせるものも恐らく見付（付↓得）ら（れな）ないであらう。吾の（多くの）人（々）は愛する必ず愛する（であらうが）然し其の愛は凡（凡↓總）て純なものとは云ひ得ない、却つて隠れたる一種の（一種の↓削除）利己心で（で↓の）（一種で）はあるまいか、其の證據（に）は殆ど毎日（の如く）社會の（生活）の中に見る事（が↓を）出来（得）るであらう。

（以下略）。 （一九二三年） 二月一八日

主観のみにとらはれたの趣きあり、口語體と記事文體の合作の感あり、文を作す時は、その中心を如何になすかを構想すべし。然し面白き文です

③ 秀逸 詩「雪の朝」

（一）我知らず／窓越しに見れば／新しき吾界をわれは見る／丸山の峯は白く／麓はうす白く木まばらなり／枯木にそよく音は／これ冬の祈りの聲なり

（二）一陣の風／麓を襲へば／落葉は白き雪相まちて／走る彼等（等↓処）の吾界に／若干の落葉／わが窓にささやく／心あせりぬ／これ彼れと吾れの名残りなり。

（三）窓を打開けて見れば／彼等（等↓処）の峯には孤松秀で／しづか屋の峰より／出で立つ煙／松の緑りに懸りて／密の物かはし。

此詩はよくうたはれてある。景情もよくあらはれ言葉にも冗がない。「枯木にそよ音はこれ冬の祈りなり」などほんとうに善い。三木

露風先生は、国語としての文章指導だけでなく象徴詩人やカトリック的な視点から指導している。また次の例のように「大きな自然の中に神を想い神に拠つて生活することよるこんだ」^{注13}露風らしい評(④)やその文学の愛好者で姻戚関係にある国木田独歩の影響を指摘するなどの専門的な評(⑤)、信仰における魂の成長を褒め、励ましの言葉(⑥)を添えることもあった。丁寧に添削したノートは一〇日ほどで返却していた。

④ 甲ノ上 作文「春の一日」(大正十一年五月四日、野辺に付んで書す)の評

感興の満ち溢れた文にして神の美を高調せるもの、最近の傑作。
一九二二、五月十六日 三木パウロ。

⑤ 詩「罪なきもの、涙」(大正十二年二月二十四日作)の評

独歩の文の影響を受けたような節もあるが、その思想は独特の物である。深さと淋しさがともなつてゐる。又文體も大分よくなつて来た。三月二日 三木パウロ

⑥ 詩「イエズスゲツマニの園に入りて悲しみ給ふ」(同年三月一五日作)の評

よく此詩を書いた、私は君がこれほどに魂を成長せしめ、又、文體を学んでゐるとは思わなかつた、最も深い喜びを君に贈る
三木パウロ

このような懇切丁寧な指導は、『秀才文壇』(明治四四年)、『文章世界』(大正二年)、『中央文学』(大正五年)などの詩選者や『こども雑誌』(大正八年)の童謡選者などの経験があつたからでもあろう。

四、露風先生と教え子・山野末市神父

なか夫人が露風の教え子である山野末市神父に宛てた未公開書簡がある。露風と山野神父の関係を知る資料として二通ほど紹介する。^{注14}

(一) 露風のために山野神父に追悼ミサを依頼するなか夫人

拜啓

本年は暖冬の気候不順の折柄お障りもなき御事と存じ上げます、私はこの頃丈夫になりました。私はこの頃丈夫になりました。私はこの頃丈夫になりました。

さて露風が亡くなりまして早くも四年になろうとして居ります、いつも私の心にかゝるの存命中気の強い人でしたので霊はどうして居るかといふことです、それをお願いがあります御都合が出来ますなれば今月二十九日に御ミサを露風の霊の為に上げて頂きたいと思ひます。どんなにか喜ぶでせうと思われまます。重ねてお願い申し上げます。／＼モニカ 三木なか

ラファエル 山野末市神父様

祈祷修道士志願者の教え子の中に、ラファエル山野末市神父がいる。山野神父は長崎市平戸出身で男六人女六人の二人兄妹の下から三番目で、父祖代々クリスチャン、叔父叔母は修道士という環境で育つた。小学校を出てすぐ大正九(一九二〇)年四月中旬に修道院に入

り、露風には同年五月下旬から大正一三（一九二四）年六月、露風退任までの四年一か月ほど教わった。随筆に「Y少年」として登場する山野少年は、露風シェンシェイと呼び生涯慕っていたという。

この書簡は露風の命日（昭和三九年一月二十九日）の一月二十九日に追悼ミサを依頼したもので、現金書留封筒で送られている。消印は切手収集のため切り取ってあり不明であるが、露風死去の四年後の昭和四三（一九六八）年に書いたと推定される。

（2）なか夫人が伝える講師期間延長（二年から四年）の理由と教え子のこと

山野神父は、昭和四六（一九七一）年五月三〇日の露風詩碑の建立にも尽力した。その式典の後、なか夫人が山野末市神父に宛てた九月初旬頃の書簡が残っている。未公開資料のため全文を紹介する。

御手紙に写真、アルバムをお受け致しました。

一ヶ年以上もなにかとお気をつかはれ、除幕式もすまされ、がっかりされてお體にお障りがなければよいがと心配致して居りました。お手紙の御様子では御元氣そうで安心いたしました。

最初に百万円と言ふ予定を見て安部さんがなか／＼寄付は集らないものもつと小さくしてはどうかしらなど、話して居りました。

予想外に多く集まり造園費、維持費にまで残るとは皆様の御厚志を難有く感謝いたします。詩碑の前の広場は陽当りもよく芝を植えたらと思つて居りましたらすでに黒土を置き種を蒔き芽をふき青くなつたとのこと私の思つて居りましたことが出来て

池も出来たとの由美しい公園になること、思います。たのしい想いです。

昔の事になりますが大正九年四月に修道院をお訪ねして其時に院長様から一年から二年来てくれないかとのお話でお断りしかねてお受けして東京に直ぐ帰り仕事をかたづけ五月の初めに引越して行きました。それから二年過ぎました時露風に私は申しました二年過ぎたので東京へ帰るのではありませんかと その時露風は申しますのに『自分が今東京に帰って替りの人が来てくれるのなればい、けれど替りの人を捜すのは無理だそうすれば小さい組の人は半端人間になつてしまふ院長様がもう帰れといふまでミッチリと教へ込まなければだめだ』と それからはなほ厳しい教へ方をしたのだと思いますが それは意地悪や責める気持ちで厳しくしたのではありません。

賢い神父様でいらつしやるからこそ厳しかったことを恨みにも思はずかへつて厳しかった先生への恩返しとおっしゃつて立派な詩碑を立て頂き露風の真意を解つて頂き満足して喜んでいること、思います

アルバムのうしろから四頁の詩碑の前の神父様お一人の写真を見て居りますと形なき形と声なき声が神父様の前に漂ふて居るように感じます、露風の声が「よく立派になつてくれました」とほ、笑みながら見つめています、

あの写真を見て居りますと靈感をおほへます、けれど淋しくはなく嬉しい様です。

秋も日増しに近づき野の取入などで御多忙になる事と思はれます。御身御大切に

この夏はことに暑うございましたがこの二三日雨などで涼しく
ほつと致して居ります、この頃少し腰が曲ったようですが気持
は元気で居ります。

アルバム難有うございました御礼申上げます。／かしこ／三木
なか

山野神父様

詩碑建立に尽力した教え子山野神父への感謝、建立までの事情や
公園の様子、なか夫人の手柄が伝わる手紙である。この資料的価値
は、露風の講師就任期間が二年から四年に延長した理由を「小さい
組の人は半端人間になってしまふ」と記し、教育的な配慮からであつ
たと初めて明らかになったことである。また「詩碑を見つめる山野
神父」の写真（現「トラピスト男子修道院写真集」集録、一九七九
年）を目にしたなか夫人が、山野神父の前に露風の「立派になつた
と喜ぶ声と微笑む顔」が漂い「淋しくはなく嬉しい」ようだ、教
え子山野少年との親密な関係であつたことを伝えている。

その後もなか夫人と山野神父の交流は続き、「拝復／御手紙と写
真と新聞とを難有く頂きました」（昭和四七年三月五日・一九七一年）
という夫人の書簡も残っている（夫人は昭和四九年四月没）。

（3）教え子ラファエル山野末市神父の語る三木露風先生

山野神父（七五歳）は、帰天する一か月前の昭和五七（一九八二）
年四月にトラピスト修道院における対談で露風先生との思い出を
語っている。そこには講師として招聘するために副院長が上京した
ことや授業は国定教科書を使用したこと、露風先生に気に入られて

養子に誘われたことなどの新事実がある。また生徒が自宅を訪ねる
と喜んだこと、洗礼式に生徒一同声を張り上げて聖歌を歌ったこと
など懐かしい思い出を伝える。残念ながら神父の作文ノートは現存
しない。対談は長文のため簡略化して紹介する。^{注15}

（原文を応答形式に簡略化、〈聞き手の質問〉↓「山野神父の答え」

「特別対談 ラファエル山野師にぼつりぼつり語ってもらう三

木露風のことなど」（聞き手パウロ高橋重幸、文責ベルクマン
ス小山昭）

〈露風の風采〉↓「それほど目立つ人ではありませんでした。背丈
も私と同じ位であつたかも知れません。三木先生
がトラピストにいらしたときは、私は満十二歳の
少年でした。四年と一ヶ月習いましたから、私が
一番長いわけです。」

〈露風の話し方〉↓「しゃしゃーよどみなく話しました。詩人だ
から詩を朗読するような調子で話すわけではありません。詩人だ
ません。特に象徴詩など、格別なものですから、
日常の話し方は普通の人と同じでした。」

〈なぜ修道院へ〉↓「R・ドン・ジェルルドの切なる要請によりま
す。副院長自ら上京、直接会って、ドン・ジェラ
ルドの意向を伝えました。しかし簡単に求めに
応じたわけではありません。《牧神会》の同人誌を
もり立てて行くことへの意気込みに燃えていました。
雑誌の仕事をなげうって行けるか、と言うことで
したが、ドン・ジェルルドも負けてはいません。」

雑誌のことはトラピストに来てからでもなんとかなるから、ともかく来てほしい、との強い勧めに逆らうことができず、来ることになりました。直ぐに応じきれない個人的な理由もあったようですが、幸い《塾》みたいなものを開いていなかったので、来れたのでしよう。」

〈教えた経験〉↓「《詩》については権威をもって教えていたようです。」

〈就任の決心〉↓「R・ドン・ジェルルドの手柄によるのでしよう。とことんまで《ひと》を信用する、その態度に心打たれたようです。夏だけでいいからと言ったら、いや、今年の夏はよくても来年の夏はどうなるかわからない、覚悟を決めた以上、家内と一緒にいき、住み込みで教える、とハッキリした態度でやって来られました。引き受けた仕事の何倍かの仕事をされたのは事実です。先生がいらした正確な年と月は、大正九年五月下旬でした。私はひと月前の四月中旬入会しました。」

〈田舎によく来た〉↓「幸い子どものない夫婦だったからでしょう。」
〈月謝はいくら〉↓「七十円だったと聞いています。その当時、小学校校長でも、そんなにもらっていないかったかも知れません。」

〈同級は野田師〉↓「いや、違います。上の組でした。私の同級生はコロンパノ師で、それに辞めて帰った《ヒラタ》と《タニグチ》の二人でした。」

〈国語の授業〉↓「たいいてい午前中でした。毎年、生徒の数が増えて行きましたが、ことさら学年別にしませんでした。」

〈教科書〉↓「ちゃんと国定教科書を使用しました。」

〈初めから四年契約〉↓「いや、そうではありません。生徒には極秘でしたが、最初は二年契約でした。それが結局四年になりました。」

〈露風の洗礼〉↓「大正十一年の復活祭に。下のおみ堂で、ドン・ジェルルド自らの手によってでした。生徒一同、声を張り上げてグレゴリアン聖歌を歌った日のことを、今でもちゃんと覚えています。」

〈北原白秋訪問〉↓「残念ながら覚えていません。」

〈露風の洗礼名〉↓「ポーロでした。」

〈露風の堅信〉↓「同日、ドン・ジェルルドが司教の許可をもらって授けました。」

〈トラピストを語らぬ理由〉↓「トラピストについて語るのには、自分にとって不適切との信念のためだと思います。」

〈露風との別れ〉↓「それが残念ながら、別れる涙も何もありませんでした。生徒が知らないうちに、先生はもう帰途についていました。」

〈その理由〉↓「それは先生が精神的に疲れていたためで、今で言うノイローゼにかかっていたためです。〔筆者注・大正十二年関東大震災の見舞いに上京、ノイローゼはそのショックと思われる。〕そのため会わない方がお互いのためと思って、ドン・ジェルルド

は黙っていたようです。「筆者注・その頃ではないかと思う。正義感に燃えた三木露風が、村の青年をなぐつたのは―子供の頃、耳にした話―」生徒一同、なぜ知らせてくれなかったのかと、ドン・ジェラルドの所に押しかけたことも、今は懐かしい思い出です。」

〈信者露風〉↓「模範的で、三木に会いたければ、下の教会に行け、と《ことわざ》のように言われたくらい、日曜祭日には欠かさずミサにあずかっていました。」

〈詩人らしさ〉↓「雲雀の巣を踏みつけ、いたく心を痛めた、あの姿です。」

〈露風宅訪問〉↓「毎日曜日と言ってよいくらい、晩課後、生徒たちみんなで訪ねました。私たちが行くと、先生は奥さんに、息子どもが来たぞ、とよく言ったものです。」

〈当時の生徒数〉↓「一番多い時は二十名いました。ヒエロニモと言うのもいましたが、戦後、長い間、佐世保の市会議員をつとめた彼がそうです。思いだします。三木家のあったあたり一面唐松の林であったことを。それから、今トラピスト公園となっている下の松林を、先生はよく散歩していました。そして奥さんが、春は山菜、秋はきのこをとっていたのも、下の松林です。」
〔筆者注・三木夫人の当別在住の頃をよく知っているのは、現在、青森藤老人ホームにいる加賀谷のおばちゃんくらいです。〕

そのためでしょう、三木露風の碑が建ったとき、老夫婦のそばに加賀谷たつさんが立ちました。三木夫人はとても美しいかたでした、とよく話していました。筆者も、何かの教会行事の写真の中に写っているお姿を拝見したことがあります。」

〈赤トンボ・野バラ〉↓「聖者偉人の生地争いと同じで、そういう事を主張しながらないトラピストは忘れられ、生まれ故郷の作となつたでしょう。有本芳水氏がまとめた三木露風全集第三巻を見てください。この事がちゃんとよく書かれています。(セバステアノ翁曰く、三木露風の《野バラ》は、大正の末期まで、丸山のスロープ一面に咲き競っていた《ハナス》のことを指し、今でも少々残っていると。ちなみに『賢きのばら』は大正十一年刊行の『信仰の曙』、『赤とんぼ』は同十年の『真珠島』に発表された。)」

〈露風歌集九千円〉↓「あれにはむしろ《和歌》が多いのに、そんなにするんですか。」

〈その後の文通〉↓「二、三回ありました。差し上げた手紙には必ず返事がきました。」

〈露風からの手紙〉↓「残念ながら紛失しました。」

〈添削したもの〉↓「いや、全部とつてあります。ただし大分の分院においてあります。」

〈養子に誘われた〉↓「そう言えば、とても真面目な顔で、両親は健在か。ハイ、元気です、と答えると、先ず両親

の所に帰りなさい、それから私の所の養子になつてくれないだろうか、と言われました。」

〈その返事〉↓「一度養子にはいれども出れなくなる、とよく解っていたので、決して頭をたてに振りませんでした。」

〈習ったのは大正九年五月

から大正十三年か〉↓「ハイ、そうです。」

〈二五周年記念祭〉↓「ハイ、そうです。下の聖堂のそばに、トラ

ピスト創立二十五周年の記念碑が建っていますが、あれを建てるため、三木先生は色々運動しました。あの字は先生の字ではなく、長い間函館市の教育長を勤め、一期だけ市長になった《齋藤与一郎》さんが書いたものです。「筆者注・右の齋藤氏は健在で、昨年（一九八一年）ひさびさに本院を訪ねました。九十幾歳と思います。」石はこの山の石です。」

五、露風先生と修道院周辺の子どもたち

(1) トラピスト修道院周辺の人々との交流

露風は、修道院内や教会関係者だけでなく地域の人々との交流もあった。例えば、土地の子どもたちを集めて文学塾を開いたことがある。だが学問や詩を作る風潮など受け入れられる土地柄でないことと、イカやイワシの大漁が続き多忙で好景気に沸いている時であったため二、三日で閉じたと伝えられている。また露風は大正一〇（一九二一）年九月三十一日に現在の当別駅前にあった当別尋常

小学校（四学級児童二六六名）で子どもたちに講話をしたという。

露風は赴任した大正九（一九二〇）年一二月、初めて目にした修道院のクリスマス会の雰囲気や修道院坂下の教会で行われた信者たちの聖劇について弟子の竹内勝太郎に伝えている。^{注18}

大正九年一二月二四日、「基督降誕祭の夜」竹内勝太郎宛三木

操書簡

今日は実に静かなクリスマスだ。時恰も満月で、降り積つた静粛な雪の上に輝いて居る。上の聖堂には鐘が鳴つてゐる。又下の信者の会堂では、晩の六時から青年会有志の聖劇を余興に催して居るので、子供や女の集つてゐる声が聞こえる。／今夜の弥撒は十二時を過ぎてから始まる、その弥撒には自分も列したいと思つて居る。今年トラピスト修道院の降誕祭に会するといふことは、自分ながら思ひがけぬことでもあつた。

(2) 随筆「トラピストのクリスマス」と戯曲「御降誕祭の夜」（大

正二二年冬）

トラピストのクリスマスは、修道士は餅を作り信者たちは赤飯を用意し、一緒に余興を楽しみ、夜が更けて聖堂でお祈りをする。

着任して三年目の露風は、大正一二（一九二三）年に戯曲「御降誕祭の夜」を書き、クリスマスの夜に信者の子ども一〇人ほどに聖書に基づく本格的な聖劇を演じさせている。その様子を次のように『フート6』に記している。^{注19}

一九二三年の冬に、私は「御降誕祭の夜」と云ふ劇を書きました。それはトラピスト修道院に居た時作つたのでした。私は、其れを書き了りましてから、私の家に來訪されたK神父に見せると、K神父は、「これは可いですね。」と言つて又考へて「御降誕の時の有様に何処から見ても合つてゐるのです。」と云つた。私は、此劇を、クリスマススの夜、トラピスト修道院周囲に居る信者の子供等に演じさせて見ようと思ひました。さうして子供等の中から十人程選んで、これを集めて、稽古をさせる事にしました。

天使が二人出て來たり、博士が三人出て來たり、羊飼が話をしたり、羊が陰で鳴いたりしました。羊の聲は、動物の聲を真似る事の上手な青年が、出したりしたのでありました。

修道士の方では餅を拵へ、修道院で働いてゐます信者等は、赤の飯を焚いて、クリスマススを祝ひました。

楽しいクリスマススが來ました。此日を待つてゐました。修道士等も信者等も。冬が來て、他人も自分も、楽しい心地で、其日を待ち望むのでありました。(中略)お祈りが始まるまで、信者たち等は、余興を観ます。孤兒院の建物の一つの室で、演出される伎を大勢集つて観ます。又、芝居ばかりでなく、子供等の唱歌や、對話や、本の朗読などがあります。人々は座つてゐる者があり、腰かけてゐる者があり、大人と子供と交つて、静かに観ています。(中略)やがて、夜の十一時四十分ぐらゐになりましたので、余興が済んで、其所から人々が出て、雪の上を歩いて、お祈りをする為に、聖堂に入ります。

(3) 未公開資料・「御誕生の夜」の台本(草稿)

露風がクリスマスに信者の子どもたちに演じさせた「御降誕祭の夜」と思われる「御誕生の夜」と題する台本(草稿)が残っていた。その台本には「聖靈学院が／降誕祭の夜上演」とメモがある。上演の年は不明であるが、署名「露風」を「羅風」と訂正した痕跡があることから雅号「羅風」を使用した大正一三(一九二四)年春頃から「露風」に戻した大正一五(一九二六)年の秋頃までの間、つまり大正一三、一四年のいずれかの二二月と推定される。上演した聖靈学院は、秋田市にある現在の聖靈学園と思われる。秋田県秋田市に明治四一(一九〇八)年にオランダの聖靈奉侍布教修道女会本部から派遣された五人の修道女が幼稚園を開設したことから始まり、聖靈学院女子職業学校を経て大正一二(一九二三)年一二月に聖靈女学院(当時各学年二学級編成、定員五〇〇名)と改称したカトリックの学院、現在の聖靈学園である。

露風と秋田市のカトリック教会とのつながりは深い。例えば東北巡講の旅の終わりに訪問する旨を伝える大正二五(一九二六)五月の「天主堂教区長ライネルス博士閣下宛」(秋田市古川堀反町二二)の書簡(控え)に「秋田市にライネルス教区長閣下をおたづねいたすのは今月末ごろになるだろうと存じます」とあり、二人は六月六日に秋田城址公園を散歩している。また露風と聖靈学院の交流もあり、女子職業学校(大正四年私立聖靈学院女子職業学校に改称)時代の大正一一(一九二二)年と聖靈女学院時代の大正一五年の講演「文学と宗教」に訪れている。^{注20}学園で長く続く幼稚園の聖劇、高校のクリスマス会言葉の祭儀に露風の聖劇の影響も推測される。

そのクリスマス劇の台本は未公開であったため全文を紹介する。^{注21}

「御誕生の夜」(相馬屋製二〇〇字詰原稿用紙一六枚右紐綴じ)

一幕

人物

羊飼 五人／天使 二人／博士(賢候) 三人／序詞一人

序詞は御誕生の次第を読む なるべく聖書にある言を朗読する

見物の前で幕の外に立って／(幕の無い所は適宜前方に出て)

舞台

銀紙を以て星の貼られたる背景／その下方遙に森の如きもの見ゆ
／幕開けば牧羊者五人、思ひ／の形して居る。／牧羊者の服装
繩の帯を締む、手にあまり長からぬ杖を持つ 焚火をして語り
居る体。

序詞ノ順序

三段に分つ／一、ヨゼフとマリアとの婚姻及キリストの誕生／二、
博士等の参拝／三、羊飼等告を蒙る。／以上聖書より引用／マテ
オ自第一章十八節至第二章十二節／ルカ自第二章八節至二十一節
序詞について

序詞は上演の初めに皆の前で御降誕の次第を述べるが、戸書きに
もしたやうに、なるべく聖書を朗読する方が善い。その聖書の読
む箇所は左の頁です。／マテオ 自第一章十八節至第二章十二節
／(及) ルカ自第二章八節至二十一節

一幕 御誕生の夜(聖霊学院が降誕祭の夜上演)

三木羅風(※露と書き、消して羅とある)

羊飼ノ一 なんとといふ暗い晩だらう

羊飼ノ二 星が見えるよ

羊飼ノ一 ああ、あの、また、きは、何といふ美しさだらう

羊飼ノ二 けれども今夜は何か有りそうな晩だな

羊飼ノ一 (黙)

羊飼ノ三 まだもう一つの星が見えるが、あれは何と云ふ光を

放つてゐるだらうなあ。

羊飼ノ四 ああ、あれ／＼あそこに誰か来たやうだぞ

羊飼ノ一 ほんとうに誰か来たやうだ／

此時天使ふたり入来る／天使白い衣装を付けて
舞ふ／天使は星の冠を冠りて出づ／羊飼等五人
の者驚きて見る其一人進み出でて問ふ

羊飼 あなたは何処から来られましたので御座いますか

天使 (冠をぬぎて手に持ち言ふには)／そなた等のために
お告げを蒙むらせようと私達は天から来た

羊飼ノ三 それならあなたは天のお使で御座いますか

天使 さうだ。私たちは天の使だ。

羊飼すべて さうで御座いますか(と一同驚く)

第二齣 独白の場

第二齣 独白の場

天使が言ふには

甲天使 こゝらあたりにお生まれになる筈だが、はてどの辺で

あらうか

乙天使 キリストの御誕生の所は何の辺であらう

羊飼まかり出て云ふには

何とエンゼル様 天使様方がこゝへおいでになつたのは何か不思議なことを御覧になるため、お下りでございますか

賢候ノ一人 ナニ、神様の使から聞かれたか。

羊飼ノ五 左様で御座います。

賢候ノB それは不思議な事があるものだ。

またもう一人の賢候が云ふには

第一の博士 不思議、不思議、不思議！

『さあ、さあ、皆さん』と羊飼が云った

さあさあ皆さん、行かうでは御座りませぬか

賢候三人早足になる

此時歌の聲が聞える（上部のト書に「早足のやうに歌ふ方がい、」）

イエズスのキリストが、／お生まれの、その時は／今なるぞ、
今なるぞ／あふげ、人々、あふげよもろびと。／新しみ神を、
あふぎまつれよ。

終

六、トラピスト修道院時代の露風と童謡運動

露風と童謡の関わりは、トラピスト修道院に赴任する前の大正七（一九一八）年児童芸雑誌『赤い鳥』の童謡復興期頃からである。露風の童謡に対する興味と関心は、大正期の童謡運動で活躍した北原白秋、西条八十、野口雨情ほどではないが並々ならぬものがあった。童謡を創作するだけではなく、募集童謡の選者、童謡普及の講演、童謡詩人会の組織、日本童謡協会の設立にもかかわっている。

童謡の創作は、大正七年七月に創刊された童謡雑誌『赤い鳥』の八月号に「毛蟲採」を掲載した時から始まる。修道院に着任した大正九年（一九二〇）年五月頃より『良友』や『少年倶楽部』などの子ども向けの雑誌に童謡を寄稿、大正一〇（一九二一）年五月『櫻

の實』に寄稿してからは毎月同誌に童謡の寄稿を続け、八月に「赤蜻蛉」を発表した。その後も童謡集『真珠島』（大正一〇年）、『お日さま』（大正一五年）、『小鳥の友』（大正一五年）などを刊行している。

また童謡選者としては、例えば大正八（一九一九）年七月創刊の『こどもの雑誌』（創刊号のみ「こども世界」）の選者となり、九月（一卷三号）の「第一回の募集童謡に就て」から翌大正九（一九二〇）年の修道院に着任した七月「募集童謡を見て」まで募集童謡の評や動向について連載している。

さらに修道院に着任後は、函館市における童話児童劇の講演・指導に出かけている。例えば大正一一（一九二二）年四月二二日に函館の童謡童話劇（函館毎日新聞社主催、函館教育会、函館区内各小学校、童謡童話劇大会賛助）において、指導と講演をしている。露風は函館講演の直前の四月一六日に洗礼を受けるまで信者としての信念が充分でないのに人前に立てないと思ひ講演をしなかつたという。洗礼後に自信ができた露風は、感冒から肺炎を併発して病床に臥せていたが「自分のやっている仕事と直接の関係も有るのだから」と講演依頼を快く引き受け「十字架を負って壇上に立つ」と意気込み、子どもに関して次のように話している。^註

天国は子供の物でございますなんじら子供の如くなるにあらざれば天国に入る能わずといふ尊い聖言もあります、また子供は天使の象徴とされて居ります。神の使いの象どりになつてをります、何人も羽の生へた嬰兒が何を意味するかは、今日われ、
が取り遣りしてゐる普通の言葉ほどにわかります、子供の魂は

汚れてをりません汚れない魂はまことが宿ります、信や望や愛の諸徳を子供は天真のまゝに表します。

その「子供は天子である」という児童観による童心の世界は、露風の第一童謡集『真珠島』(大正一〇年)に形成されているといえる。収録作品は大正七(一九一八)年六月から同一〇(一九二二)年八月までの修道院時代三年間の作七五篇である。ここに収録された童謡の特色は、「幼年時代の体験と故郷の風土山川を慕う心を、日本の山村に特有な素朴な風景にセンチメント感情を織りこんで歌い込んでいること」と指摘されている。^{注23}

このトラピスト修道院において作詩した母を慕う孤独な少年の淋しさをうたった「赤蜻蛉」、故郷を追慕した「初夏」などの発想の基底に、トラピストの大自然の環境の中で、故郷や親元を離れた修道士志願者の少年や附属孤児院の子どもたち、さらには地域の子どもたちと触れ合ったことも関わっているであろう。

また露風の『ノート20』にあるように、童謡運動における函館市内の小学生たちと交流も看過できない。^{注24}

『函館の小学生』は、函館市の住吉小学校より発行す。露風は、同市の弥生小学校にて、童謡に就ての話をし、且つ又、同市の女子小学校にて、童謡を述べたり。函館師範学校にてありたる夏期大学の講師なりしことあり。『函館小学生』の同号には、露風の選にかゝる児童作品の入選童謡を掲載せり。函館新聞の毎月募集の一般童謡の選者は露風。函館教育会と函館毎日新聞社との共同の歓迎会に出席せり。

露風の童謡に関する見解や主張は、大正一四(一九二五)年一月の雑誌『童謡』九号(日本児童協会)に寄稿した「童謡と教育」が注目されるぐらいである。しかし露風の童謡運動は地味な活動であるため知られていないが、トラピスト修道院に着任してからも続けられていたのである。

おわりに

修道院での露風の一日は、祈りはもちろんのこと、午前中は授業、午後は瞑想、思索、作詩、霊的読書・研究であった。露風先生は、授業で修道士志願者の少年たちの詩や作文に信仰に基づく丁寧な添削指導を行った。露風の自宅を訪れた少年たちに息子の如くに接し、教え子のY少年は神父となり生涯慕った。また付属の孤児院の子どもたちや地域の信者たちの子ども、さらには函館市内の小学生たちとも交流を深めていたのである。

露風の童謡には、トラピスト時代の子どもたちや親しくしていたタルシス助修士の神における童心に触発された「子どもに帰った心」がある。

修道院を訪問して「精神的に一新紀元を画した」と言った露風は、四年間のトラピスト修道院生活を終えて東京に戻る。しかし再び詩壇に戻ることはなかった。その後の露風は「大正十五年で第一線を退いた」、「宗教詩人となり作の魅力に乏しい」、「忘れられた詩人」などの評価を与えられた。だが修道院から新たな時代を歩み始め、その後四十年間創作し続けた露風の真の価値は別なところにある。露風は、トラピスト修道院において「行住詩録」としての「短唱」を多く作ることに關して「この頃のすさび」に次のように書いてい

る。^註

心にもない詩を作つてあざむくよりは、心ばかり、獨り楽しむのは宜い。昔稽康が「山澤に遊んで魚鳥を觀る」と言つた心こそ、いつの世までも失ひたくないものだ。

稽康は、嵇康といひ魏晉時代における竹林の七賢人の一人で、俗人に接し俗事に携わることを嫌忌し名利や政治的な場を避けたといわれる。この「山澤に遊んで魚鳥を觀る」は、『文選』や『枕草子』にも引かれていて、ことからよく知られている。

大自然に囲まれたトラピスト修道院で世俗との隔離、沈黙、觀想生活を過ごし、「天使のこころ」の子どもたちと接した露風は、この言葉に共感したことから三鷹でひっそりと暮らしたのであろう。

謝辞

本研究は、令和五年度のJSPS科研費JP20K00297の助成を受けた「三木露風の未公開資料の公開・整理及び基礎的研究」による。研究にあたりご協力を得たトラピスト修道院、北斗市郷土資料館、童謡の里龍野文化振興財団「霞城館」、三鷹市スポーツと文化芸術文化課、学校法人聖靈学園に感謝申し上げる。

注

(1) 三木露風直筆『ノート32 美学草案(一九二一年九月よりトラピスト修道院にて)』霞城館所蔵

(2) 三木露風「修道院の生活の組織」「トラピストの業務」「北海

道トラピスト修道院の略歴』『修道院生活』新潮社、大正一五(一九二六)年。『当別トラピスト百年 一八九六一一九九六』、トラピスト修道院編

(3) 三省(ミカエル)「聖リタ・当別教会略史」『丘』当別教会編

(4) 「三木露風氏の講演」『公教家庭の友』第四八号、天主教教会、大正一二(一九二三)年二月二三日、二二―二五頁

(5) 高島源一郎『トラピスト修道院創立史』手稿本、トラピスト修道院所蔵、三七九頁

(6) 三木露風「我が美感の径路」『美学草案』大阪毎日新聞社、東京日々新聞社、大正一三(一九二四)年、二五頁

(7) 三木露風、跋文「良心の後に」『良心』白日报社、大正四(一九一五)年、一六六―一六七頁

(8) 毛利三彌「イプセン作『人民の敵―異文化社会学的視点―』『成城文藝』二四〇号、平成二九(二〇一七)年六月

(9) 百田宗治「三木露風『現代詩』白井書房、昭和二三(一九四八)年、四二頁

(10) 注5に同じ、三八四頁

(11) 注5に同じ、三九二頁

(12) 未公開資料『三木露風添削作文帳』北斗市郷土資料館所蔵

(13) 注7に同じ、一六七頁

(14) 未公開資料、なか夫人から山野末市神父宛書簡、トラピスト修道院所蔵

(15) トラピスト内雑誌『鐘楼』九号、昭和五七(一九八二)年四月、七一―一頁

(16) 「三木露風の文学塾跡」『上磯町歴史散歩』上磯地方史研究会編、

昭和六一（一九八六）年、五四頁

参考文献

- (17) 大井洋一「三木露風が愛した当別」平成元年度研究誌『磯路』第二〇号、平成二（一九九〇）年三月、四五頁
- (18) 富士正晴『竹内勝太郎の形成―手紙を読む』未来社、昭和五二（一九七七）年、一〇四頁
- (19) 三木露風直筆「トラピストのクリスマス」『ノート6』霞城館所蔵
- (20) 三木露風直筆『ノート24 書簡』霞城館所蔵。『山崎新聞』、昭和三（一九二八）年七月六日。『秋田魁新報』大正一一（一九二六）年六月七日。「秋田山形新潟巡講記(二)」『小羊』昭和三（一九二八）年二月
- (21) 未公開資料、三木露風、戯曲「御誕生の夜」、三鷹市所蔵
- (22) 「子供の意義と会の目的とに就て」『函館毎日新聞』大正一一（一九二二）年四月二四日
- (23) 滝澤典子「三木露風の童謡の日本的と西欧的傾向」『日本歌謡研究』第一六号、昭和五二（一九七七）年三月、二二―二二頁
- (24) 三木露風直筆『ノート20』霞城館所蔵。雑誌『函館の小学生』は大正二二（一九三三）年七月に函館教育会が編集、小学生の読み物として創刊し、昭和一八（一九四三）年一二月に廃刊。よって講演等は、大正二二（一九三三）年七月から修道院を辞す大正二三（一九二四）年六月の間か。
- (25) 三木露風「トラピストより」『修道院雑筆』新潮社、大正一四（一九二五）年、一六一―一八頁
- 藤田圭雄『日本童謡史』あかね書房、昭和四六（一九七二）年
- 安部宙之介『三木露風研究』日本図書センター、昭和五八（一九七八）年
- 安部宙之介『続三木露風研究』日本図書センター、昭和五八（一九七八）年
- 弥吉管一『日本童謡詩教育の歴史的研究 第二卷』溪水社、平成元（一九八九）年
- 『学園史―光のまなびや―』聖霊学園編、平成元（一九八九）年
- 森田実歳『三木露風研究―象徴と宗教―』明治書院、平成一一（一九九九）年
- 『光の子―聖霊学園一〇〇年のあゆみ―』学校法人聖霊学園、平成二〇（二〇〇八）年

